

会議ファシリテーションの進行手順に関する基盤的考察[†]

—「現実」と「理想」とを架橋する「方法」の理論的意味—

佐々木英和*

宇都宮大学地域連携教育研究センター*

話しあいや会議をする上で、ファシリテーター役の人が、論理的に的確に思考していくための手順を理解し習得していることが望ましい。ファシリテーション手順としては、「理想」と「現実」と「方法」の三つの水準に分けて考えることが有効である。「理想」に相当する議論については、目的論的思考を「目的—手段—対象」の三項関係を基本として展開して論じてもらうのに対して、「現実」に相当する議論については、因果論的思考を「原因—条件—結果」の三項関係を基本に置いて論じてもらうとよい。その上で、両水準を架橋するものとして「方法」を具体化するという手順で議論できるよう支援するとよいわけである。

キーワード： 教育目標、教育方法、教育評価、方法、対象、条件

はじめに

たとえば職員会議は、日常的な教育実践そのものからすれば、「メタ実践」に相当する。このようなときに話しあいや会議を進めるに当たって、「ファシリテーション」という考え方を実践的に取り入れることは、ただ漫然と話しあうよりも、はるかに効率的で効果的である¹⁾。だが、ファシリテーションの技術や手順ばかり身につけて洗練させていっても、会議そのものの生産性や議論水準は上がってこない。というのは、会議をつうじて何かを達成しようとする際には、ある程度まで熟達した論理的思考が必要とされるからである。特に、現実には起きている問題を解決しようとする際には、それを理想へと近づけていくための思考手順が要求されてくる。

本稿は、会議を生産的に進行する際の手順について、「現実水準」と「理想水準」とを対比させ、それを接続する「方法水準」の意味について、基盤まで降りて考察するものである。こうした思考を、会議を進めるファシリテーター役が理解しておくことは、実際に役立つことである。本稿は、なるべく多くの人を巻き込んで、論理的思考法を共有し、会議等を生産的にするための可能性を探るものである。

1 目的論的思考と因果論的思考の基本的構造

今や誰もが日常用語として用いている「現実」と「理想」といった二つの言葉は、原理的な出発点においては同一のものではなく、両者の間にはギャップがある。基本的に接続しておらず、関係の薄いもののどうしを結びつけるためには、間接的に媒介してくれる「媒体」となるものが必要となる²⁾。

さて、現実と理想との関係を考える筋道は、主に目的論的に展開させていくことが適切だと思われる。つまり、「現実を理想へと合致させる」もしくは「現実を理想へと近づける」という「目的」のために、どのような「手段」を選ぶかの問題である。だが、因果論的方向からも、この筋道を捉えておく必要がある。というのは、何らかの「原因」により「現実が理想に一致する」もしくは「現実が理想に近づいてしまう」という「結果」がもたらされる可能性を想定できるからである。よって、現実と理想とを結びつける「媒介項」について、目的論的方向と因果論的方向との双方から確認する必要がある。

(1) 「目的—手段—対象」という三項関係

目的論は、「目的」と「手段」との関係を中心に考える。この場合、「手段」が、現実と理想とを媒介するものである。この「手段」の意味合いを掘り下げて考えてみる必要がある。

手元の和英辞典で「手段」に相当する英単語を調べてみると、「最も一般的な語」として“means”という英単語が示されている³⁾。この“means”は、

[†] Hidekazu SASAKI: A Fundamental Consideration on the Procedure for Meeting Facilitation: A Theoretical Significance of the "Method" Forming a Bridge between "Reality" and "Ideal"

* Center for Education and Research of Community Collaboration, Utsunomiya University

第一義的には“(両端の)中央”とか“中庸(moderation)”などを意味する名詞の“mean”が複数形となったときに、“方法、手段、機関(method, way)”を意味するものである⁴⁾。このように、「手段」とは、何かと何かとの間に位置する「真ん中」といった意味合いを持つ概念である。

そうすると、「手段」が「目的」と何との間の「中間項」なのかという概念的問題が発生する。言い換えれば、「目的」と「手段」といった二者関係だけでは浮かび上がってこない必然的なものを描定せざるをえない。そのため、「目的—手段」関係の文脈で用いられる「目的」という日本語の曖昧さを明確化していきたい。結論を先取れば、「目的」という言葉には、「目的そのもの[そのこと]」と「目的とされるもの[こと]」といった二重の意味合いが隠れていることを読み取る必要がある。

和英辞典で“目的”に相当する英単語を調べると、“purpose”をはじめとした複数の単語が示されている⁵⁾。そこで、大部分の綴りが重複している英単語の“object”と“objective”とが、ともに「目的」という日本語に訳されることのある名詞であるのにもかかわらず、辞書の意味として微妙なニュアンスの違いがあることに着目し、それを手がかりにして考えてみる⁶⁾。まず、“object”にも、“目的、目標”という意味があるけれども、“物体、事物、もの”という意味が真っ先に書かれていて、“対象物”という意味もあることを強調しておきたい⁷⁾。これに対して、“objective”が名詞として用いられる場合には、“(努力の向けられる)目標、目的”という意味があるけれども、「対象」を意味することはない⁸⁾。そこで、日本語では「目的」とも「対象」とも訳されるような二重の意味があって区別しづらい“object”について、“objective”との対比を先鋭化して理解する際には、それを「対象」を意味するとする。これにより、両者の関係を対比的だとみなすことができ、“objective”が「<目的>そのもの」であり、“object”が「目的とされる<対象>」を意味すると理解できる。前者をそのまま「目的」と呼び、後者を「対象」という言葉に置き換えれば、「目的—対象」関係が改めて問われる。

ここで、「目的」と「対象」との基本的関係として、「第一の出発点」は「目的“objective”」であり、「対象“object”」は暫定的な着地点と化す。だが同時に、「対象“object”」は、改めて「到達すべ

き」もしくは「めざすべき」着地点として「目的“objective”」を見据え直す「再出発点」となる。このように、目的論は「目的—対象」関係において、回帰的・循環的な構造を持つが、その媒介項として「手段」が必須だというわけである。原理的に「目的—手段」といった二項関係で成り立つ目的論の基本的骨組みは「<対象>を<目的>へと実行・実現する<手段>」となり、実践的にも「目的—手段—対象」といった三項関係で成り立つものである。

また、「理想—現実」の構図で言えば、理想が「目的」に該当し、「対象」として扱われるべき現実が、「目的とされるもの」もしくは「目的とされること」として、まさに「対象化」される。「目的とされる対象」を含んだ「現実」水準は、媒介項としての「手段」の仲介を得て、「目的そのもの」を包含する「理想」の水準へと接続することになる。

(2)「原因—条件—結果」という三項関係

因果論は、「原因」と「結果」との関係で成り立つ論理である。手元の和英辞典を引けば、“原因”に相当する英単語としては、“(ある結果を生み出す) cause”が真っ先に出てくる⁹⁾。また、“結果”を示す英単語としては、“ある原因に対する直接の結果”としては“effect”が用いられる¹⁰⁾。よって、因果論的な文脈で「原因と結果」という日本語を英語表記すれば、“cause and effect”となる¹¹⁾。

因果論的に思考するならば、時間的順序が必然的になり、時間的に先行する「原因」が、時間的に後行する「結果」を「生み出す」ということが基本になる¹²⁾。そのため、「原因Aゆえに結果A'」といった直接的な関係が成り立つ必然性があり、そこには、間接的な媒介項は不要のように思える。たしかに、「原因Aゆえに結果A'」は、原理的な「芯」に相当する骨組みを構成する。だが、実際には「原因Aであるのにもかかわらず結果X」というように、「特定の原因」から「想定しない結果」が生じてしまうケースが多々存在する。よって、原因Aが必ずしも結果A'をもたらすとは限らないという事態を、どのように説明できるかが鍵になってくる。

見方を変えるならば、「原因」と「結果」とをつないでいる中間項の如何が関わっている。ここで、仏教的文脈の“因果”という言葉が、“直接的原因(因)と間接的条件(縁)との組合せによってさまざまな結果(果)を生起すること”だと定義されていることに着目してみたい¹³⁾。また、仏教的文脈

で“ものごとの生ずる原因”と定義されている“因縁”という日本語において、“因は直接的原因”であり、“縁は間接的条件”であると説明されていることにも注目しておこう¹⁴⁾。こうした考え方を援用すると、原因と結果を結ぶ媒体たる中間項に対しては、「条件」という日本語を与えるのがふさわしい。辞書の定義としても、“条件”とは、“ある物事の成立または生起のもととなることからうち、その直接の原因ではないが、それを制約するもの”とされている¹⁵⁾。つまり、複数のケースにおいて全く同じ「原因」が存在していたとしても、「条件」が異なってしまうのであれば、自ずと「結果」も異なりうるということである。

和英辞書を引くと、日本語の“条件”の英語訳には“condition”が当てられている¹⁶⁾。哲学的定義における“条件”は、“ある原因から出発して、結果が生じてくるために必要な事情”である¹⁷⁾。つまり、「条件」とは、「Aが、Cに条件付けられるならば、Bになるだろう」というように、因果論的思考における「結果」を先取りするものである。図式的に言えば、「原因A（→条件C）→結果B」という形になる。原因Aは、条件Cを媒介として結果Bへと至るというわけである。逆に考えると、条件が整わないなら、ある原因が、結果として熟すことのないまま、原因の域にとどまったままでありうる。

では、この考え方を「現実－理想」という発想に直に呼応させると、どうなるか。実際には多くはないケースだろうが、めざしていたわけではなかったのに、ある理想が叶ってしまうことがある。むしろ、ある結果がまさに理想的な場合もあれば、理想とほど遠いこともあるけれども、まさに“結果論”¹⁸⁾として、その時点を基準にした「現在」における現実が、その時点からすれば「未来」に相当する時期に何らかの理想状況が実現してしまう事態が生じたときには、因果論的な説明が可能になる。これは、「過去」に「何らかの＜良い原因＞」があり、それに対する「現在」において、必然か偶然かはともかく「何らかの＜良い条件＞」が整い、そのままの因果論的な流れに則った「未来」において「望ましい結果」が立ち現れた事態であると説明できる。

2 「手段」と「条件」との相互関連性

目的論的には、「何を真に対象とすべきか？」を踏まえて、「何を目的としたいのか、何を真に目的

とすべきか？」を見定めて、「その価値に対して妥当な手段か何か？」が問われる。これに対して、因果論的には、「何が真に原因であるのか？」を出発点にしつつも、「いかなる条件が介在するのか？」によって、「どのような結果へと帰着したのか、帰着しそうなのか？」という問いかけがなされる。

このとき、「目的－対象」関係の媒介項が「手段」であり、「原因－結果」関係の媒介項が「条件」であることを再確認しながら、目的論と因果論の双方で混乱しやすいポイントを事前に押さえておく必要がある。すると、逆説的なことに、ともに媒介項である「手段」と「条件」とが密接に関連しあうという事態が浮かび上がってくるのである。

(1) 「手段」と「目的」との混同しやすさ

目的論においては、「目的－手段－対象」という三項図式を基盤にして考えることになる。手段には、「何のための手段か？」という目的論的問いが含まれているが、それは忘れられやすいのである。

第一に、手段が目的と混同されるケースである。たとえば、働くことにより一定以上の収入を確保することは、ある程度以上の幸福な生活を送るという目的のために必要な手段である。だが、日々の慌ただしさに忙殺されていると、何のために働いているのかわからなくなり、自分では無自覚なまま手段それ自体を自己目的にして生きている人が出てくる。

第二に、手段と目的との関係が転倒してしまうケースである。幸福な生活を送るために稼ぐことに必死になっているうちに、稼ぐことそれ自体が第一の目的になることがある。そのために、健康などを犠牲にして不幸に陥るとすれば、肝心の目的と手段との位置が逆転してしまった状態になってしまう。

第三に、手段が目的を変質・変容させる「理由」になるケースである。たとえば、200年前だったら、人間が空を飛ぶことは夢に過ぎなかった。だが、航空技術の進歩は、夢を現実にしてしまった。飛行機という手段の存在が、人間が空を飛ぶことを日常茶飯事に近いものにしてしまった。そして、かつては人類の夢に過ぎなかった宇宙旅行が、最近では、現実的に達成可能な目標とみなされている。「新たな手段」が存在・所有・行使可能性を発揮することが「新たな条件」となって、「新たな目的」が生み出される「理由」が発生するのである。

(2) 「原因」と「条件」との混同しやすさ

目的論レベルでは、「目的」と「手段」とが混同

されやすい。同様に、因果論レベルでは、「原因」と「条件」とが混同されやすい。このことについて、少年犯罪を例に取って説明し、注意を促す。

第一に、条件と原因とが混同されるケースである。たとえば、ある生徒が、バタフライナイフで別の生徒を刺すという事件を起こしてしまったと仮定しよう。もし教師が事前にバタフライナイフを生徒から取り上げていたならば、「バタフライナイフをく手段」として用いた事件は起きていなかったであろう。だが、そのことは、「バタフライナイフによる事件や事故」を事前抑止するための「条件制御」として機能していても、その生徒が何らかの道具を用いて、誰かに危害を加える危険性までも制御したことにはならない。というのは、この場合には、何らかの形で相手に暴力を振るいたいという「個人的動機」こそが、“主要な原因”たる“要因”だからである¹⁹⁾。その生徒がバタフライナイフを所有することは、事件を起こす際の重要な「条件」ではあるが、「根因」として「原因」の根本を占めるわけではない。この種の事件は、「道具」が色々と代わって起きうる。「金槌を用いた事件」や「カッターナイフを用いた事件」が十分に想定できるだろうし、もし仮にその少年が拳銃を所持していたとすれば、「拳銃発砲をつづいた事件」も起きうるのである。

第二に、条件と原因との関係が転倒して考えられがちである。たとえば、拳銃発砲事件では、弾丸が詰められた拳銃を用いて「引き金を引く」という行為がそれ自体が「起因」に当たる²⁰⁾。「起因」とは、「引き金」に喩えられる原因であり、何らかの「きっかけ」を伴って「結果」を生み出す。だが、そもそも拳銃に弾丸が詰められていなければ、いくら引き金を引いても、結果的に「拳銃発砲による犯罪」は成り立たない。よって、この喩えで言えば、弾丸こそが「主因」である。つまり、拳銃は「銃犯罪が成り立つための必須条件」ではあっても、「銃犯罪が起きるときの原因そのもの」ではない。たしかに、諸々の「条件」のうち、もっとも基盤に位置する「前提」に相当するものに注目することは極めて意義深い²¹⁾。実際、拳銃の所有という前提があってはじめて、銃犯罪は成立する。だが、「ある手段の存在・所有・行使可能性」という「条件」でもある「前提」がないと銃犯罪が起きえないことに目を奪われ、「前提」を「原因」と見誤ってはならない。

さらに第三に、条件が原因を変容させるケースも

十分に想定できる。道具が、原因に寄与するという転倒的事態である。ある少年が、何らかの形で拳銃を所有できたために、何かを拳銃で撃てみたくなったという心理が働くこともあろう。つまり、何らかの道具を持つことができたことが、犯罪の「誘因」になる可能性は否定できない²²⁾。だがだからといって、その「何か」が「人」とであるとすれば、何らかの人間に対する恨みというような「主因」が存在するはずである。「事件の誘因になりうる可能性」が「事件の原因になるという事実を生み出すこと」へとそのまま移行するわけではない。もし仮に、そうした主因がなかったのに、人に向けた発砲事件が起きたとすれば、その少年が「ヒト」と「モノ」とを区別する感覚が喪失しているという別の条件が揃っていたために、発砲対象がたまたま「ヒト」になったとみなすべき仮説が出てくる。

実際には、「強力な原因」こそが「必然的な結果」をもたらす。媒体となる道具が変わっても、結果レベルの根幹部分は変わらない場合がある。弾丸という「主因」を所有していれば、素手で弾丸を相手に投げてぶつけるという形の暴力行為すら可能である。拳銃を用いるか、素手を用いるかという前提は異なるけれども、原因は、犯罪という結果につながりうるのである。いずれにしろ、拳銃そのものを原因であるを取り違えてしまうならば、暴力そのものを生み出す「根因」を見落とすことになる。

ここでは、凶悪な犯罪を例にとってみたが、「犯罪につながる媒体」ばかりに目を奪われずに、「原因が生まれる<条件>」たりうる「背景」も含めて、「犯罪の温床となる原因」を突き止め、それを根っこから絶つ可能性を探るべきだと示唆される。

3 目的論と因果論との呼応的照合の可能性

本稿では、目的論と因果論とを呼応的に照合させることを試みている。だが、あらかじめ、その理論的限界を認識した上で、実践的に統合させる可能性を探るという筋道を取らざるをえない。

(1)「原因」と「目的」との区別と接近

因果論にいう“cause”は「原因」と訳される。だが、この単語が「理由」とも訳されることに注目する必要がある²³⁾。つまり、「理由」という言葉が必ずしも「原因」に還元されないことに着想を得るならば、「理由」の中には、因果論的発想だけでなく、目的論的発想を見出しうることを強調できる。

実際、“cause”には、“大義”や“大目的”という意味がある²⁴⁾。したがって、「目的」が「原因」になるという可能性を指摘する必要がある²⁵⁾。たとえば、何かを成し遂げたいと目的を持つことそれ自体が、「何かが成功した」という「将来的な結果」をもたらすための重要な原因になりうる。「動機」は、行動論レベルでは「原因」の位置を占める。

こうして、「目的」がそのまま「原因」の位置を占める可能性は、論理的にも実践的にもありうる話なのである。よって、目的論と因果論との関係において、始発点を共有させる可能性は広がるのである。

(2) 「目的」と「結果」との区別と接近

目的論と因果論とは、そもそも異なる思考手順であるため、帰着点のレベルでは、論理的に別物として扱わざるをえない。そこで、「結果」という言葉をめぐる、幾層かの区別をしておく必要がある。

まず、「すでに<結果>と化したこと」と「未来的に<結果>として扱われそうなこと」との区別をする。これは、英語の“result”と“outcome”との比較で考えられる。前者が、直接的な原因に導かれた「結果」であるのに対して、後者は、因果関係のはっきりしない「結果」として用いられることが多い²⁶⁾。また、前者が、事後的な事柄として扱われるのに対して、後者は、「これから起きそうなこと」を視野に入れた概念である²⁷⁾。こうして、“result”が「すでに<結果>と化したこと」のみで扱われるのに対して、“outcome”は、「過去のな<結果>だけでなく「未来的に<結果>として扱われそうなこと」も含む概念であることが確認できる。

さて、「すでに<結果>と化したこと」に対しては、まさに「現実」という言い方が与えられる。これに対して、「未来的に<結果>として扱われそうなこと」に対しては、「新しい現実」すなわち「新・現実」という言い方を与えてよいだろう。よって、“result”はあくまでも「現実」の水準で用いられるのに対して、“outcome”は「現実」水準だけでなく「新・現実」水準でも語りうる概念である。

そこで、未来を見据えて「結果」を思考した場合に、「予期される結果 “expected outcome”」と「望ましい結果 “desirable outcome”」とが似て異なることも確認しておこう²⁸⁾。前者は「因果論的に予測される結果」であり、後者は「目的論的に希望される結果」だという区別ができる。

まず、「予期される結果 “expected outcome”」

とは「予期される<新・現実>」であり、因果論的必然性としては「冷静な観測の結果」である。たしかに、“expect”という動詞には、「予期する」だけでなく「期待する」という訳語がある²⁹⁾。そのため、「期待される結果」という言い方をした場合には、「希望的観測を含んだ結果」でもあることが頻繁にあり、「理想」を念頭に置いて思考されていることも多々あると想定できる。だが、これは、「結果」に対する思考態度として、あくまでも因果論の延長上で考えられているとみなすべきものであり、「理想」に置換することは不可能である。

これに対して、「望ましい結果」とは、何らかの現実を念頭に置いた理想主義的な意味合いがあり、潜在的に目的論的文脈で語られている。その点で、「望ましい結果」とは、「希望的観測」というよりも、「希望そのもの」なのである。それは、実質的に、ほぼ「理想」もしくは「目的」と同義にみなして置き換え可能である。また、「理想」や「目的」とは、「望ましい<新・現実>」だと言ってもよい。

このように考えてくると、「予期される結果」と「望ましい結果」との間には、いかんともしがたい段差と距離があるのを再確認できる。「予期される<新・現実>」と「望まれる<新・現実>」とは全くの別物である。そこで、前者を後者に合致させたい、もしくは近づけたいのであればどうするかという点で、改めて「媒体」が鍵になってくるのである。

4 「現実」と「理想」との媒介たる「方法」

あらかじめ結論を述べると、「方法」という言葉は、現実と理想との媒介的役割を果たすのみならず、目的論的思考と因果論的思考とを媒介させる概念として重要になる。そのことを踏まえて、「現実－理想－方法」という図式で思考することが、現実主義と理想主義とを接続させるために有効である。

(1) 「方法」という概念

手元の和英辞典で「方法」という日本語を引いてみると、“仕方”という文脈においては“way”と“method”といった英単語が示されている³⁰⁾。ここで、両方の単語の元々の意味として、ある地点から別の地点へと行く際の「道」とか「経路」というニュアンスが根底に流れていることを確認しておく。

まず、前者の“way”について、改めて英和辞典を引き直してみると、“仕方、やり方”とか「手段、方法」という意味も示されているけれども、第一義

的には“道、道路”という日本語が示されていることを再確認できる³¹⁾。また、“method”にも、“(学問研究または教授法などの論理[組織]立った)方法、方式”だけでなく、“(思想・話の内容などの)整然とした[組織だった]順序”とか“(理路)整然”および“(仕事・方法などの)秩序、規律正しさ”といった意味もある³²⁾。さらに、西洋哲学的観点に依拠すれば、“方法”という日本語の大本のギリシア語の“methodos”は、“meta (沿って)と hodos (道)により、一般にある目標に向かう道に沿って進むことを意味した”のである³³⁾。

そうすると、日常的に用いている「方法」という日本語について、目的論的な用いられ方はもちろん、因果論的な用いられ方を認めることができる。つまり、目的論的文脈で媒介項となる「手段」については改めて、理想を現実近づけるための「道筋」もしくは「筋道」としての「方法」という言い方が与えられるのと同時に、因果論的に現実が理想へと向かう際の「経路」を「方法」と呼んでよいのである。よって、「方法」は、原理的に言って、理想と現実との関係を目的論で接続するのみならず、現実と理想とを因果論的にも接続してくれる概念である。

このとき、「方法」の適切性とは、「理想」に向けた価値的妥当性と、「現実」を基盤とした実際的確性との総和だとみなせる。一方では、ある「方法」が、「理想」を基準とした「価値」に照らしあわせて矛盾が生じていないかどうかが評価基準になる。他方では、「方法」が「現実」を基盤として実行可能・実現可能なものになっているかが問われる。この両面からのチェックがなされることで、「方法」それ自体の自己目的化」が防げるであろう。

(2)「現実-理想-方法」のトライアングル思考

現実主義と理想主義とは、同じ地平に並べれば対立する考え方になるが、うまく組み合わせすることも可能である。そして、両者を媒介するのが「方法」という概念である。この考え方を実際の議論として応用するならば、現実を把握するとともに、理想を描き出して、両者をつなぐ方法を選択することになる。図式的には、右上の図のように「現実の把握」、「理想の描写」、「方法の選択」の三点で示されるトライアングルを基本とする思考法が提案できる。「現実-理想-方法」の三点思考である。

一方では、理想を出発点にして、目的論的手順にしたがい現実へと下りていく論じ方がある。まずは

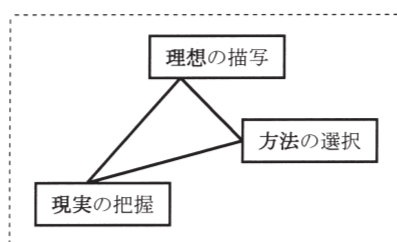


図 「現実-理想-方法」のトライアングル

理想を自由に語りあってイメージ化し、前向きな気持ちを高めてから、現実を直視するというやり方である。高い理想を達成するための覚悟を決めて、どのような方法を選ぶかを論じることになる。

もう一方には、現実を出発点にして、因果論の手順にしたがい理想へと上っていく論じ方がある。現実を把握する議論を十分に深めた後に、それとは別に理想を具体的に描写する議論を深める。この場合、どのような方法を選べば良いのかを論じる際に、理想とする基準を下げてでも、現実水準と理想水準との確実な橋渡しを優先するケースが出てくる。

このようにして目的論的思考と因果論的思考との往復運動を反復させる中で、適切な方法を探っていくことになる。これにより、理想主義に逃避しすぎず、現実主義にも埋没しすぎない議論が可能になる。

まとめにかえて

本稿で展開した議論は、一見して原理的で抽象性が高いけれども、論理的整理が必要となる会議の潜在的基盤を支えるという意味で、実践的な即戦力を発揮すると思われる。話しあいや会議のファシリテーション役には、この内容を理解し、自分なりに応用できるようにすることを奨励したい。

— 注・引用文献 —

- 1) コミュニケーション論的な観点から踏まえて、会議を生産的にしようとする良書としては、釘山健一『「会議ファシリテーション」の基本がイチから身につく本』(すばる舎、2008年)がある。
- 2) 手元の和英辞典で“媒介”という日本語を引くと、“媒体”を参照するように示される(小島義郎・竹林滋・中尾啓介編著『カレッジライトハウス和英辞典』、研究社、1995年初版、1369頁)。ここでは、“媒体”が“medium”という英単語に相当すると確認できる(同上)。次に、英和辞典で“medium”を引き直すと、“(力・効果

- の伝達的手段となる) 媒介物、媒質、媒体”とか、“媒介、手段、機関 (means)” および“(文学や音楽の) 表現様式、テクニック”といった意味が明示されている(小稲義男編『研究社 新英和大辞典(背革装) [第5版]』、研究社、初刷 1980 年[27 刷 1994 年]、1319 頁)。だが、この単語では、第一義的な訳語として“中間、中位、中庸 (mean)”とか“中間にあるもの、中間物”を意味することにこそ注目する必要がある(同上)。
- 3) 小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、769 頁。この辞書では、“対策”として“measure”が、“(やり方の意味で) way”が、“段階的処置”として“steps”が、“便宜的な手段”として“expedient”が示されている(同上)。また、“「最後の手段として」の意味の成句”として、“as a last resort”も示されている(同上)。
- 4) 小稲編、前掲辞典、1314 頁。なお、“mean”が形容詞として用いられるときには、“(位置・順序などで) 中間の(intermediate)”とか“(二つの時の) 中間の(intervening)”という意味があるのに加えて、“(種類・品質・程度・価値などが) 中庸の、平均の(average)”という意味がある(同上)。また、この単語は、数学的文脈でも、“平均の”という意味になる(同上)。
- 5) 小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、1724 頁。類義語としては、“purpose”が“達成しようと決意している目的”であるのに対して、“aim”が“具体的な目的”であるけれども、“目的”という意味で、同じように使う場合が多い(同上)。また、“end”は“明確な計画的手段で到達する目的”のことであり、“goal”が“最終的目的”のことであり(同上)。
- 6) “object”が“努力行為の目的”であるのに対して、“objective”は“かなり具体的で達成可能なもの”とみなされている(同上)。
- 7) 小稲編、前掲辞典、1457 頁。なお、動詞で“object”が用いられる場合には“反対する”という意味がある(同上、1458 頁)。よって、この単語には、根底に「相対するもの」というニュアンスが含まれていると考えてよいだろう。
- 8) 同上。なお、“objective”が形容詞として用いられるときは、“客観的な”を意味する(同上)。
- 9) 小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、534 頁。他に、“起源”を意味する“origin”や、“起こり”を意味する“beginning”が、“事故・事件とは限らず広い意味での起源をいう”と説明されている(同上)。また、“規模の大きい、根の深い問題などについていう”ものとしては、“根源”を示す“root”が挙げられている(同上)。
- 10) 同上、524 頁。他には、“最も一般的に、ある行為・事件の結果をいう言葉”が“result”であり、“consequence”は“原因に対する直接の結果としてではなく、前の出来事と関連して出てくる結果を表し、result より改まった語”だと説明されている(同上)。なお、この和英辞典では、“outcome”が、“問題点を含んだ出来事などの結果”と説明されている(同上)。
- 11) 株式会社アルク「英辞郎 on the Web」による検索で再確認した。<http://www.alc.co.jp/> (検索日: 2014 年 3 月 31 日)。なお、“原因と結果との関係”の訳語としては、“causality”と“consequence”が示されていた(同上)。
- 12) 下中彌三郎編集兼発行『哲学事典』(編集委員: 林達夫・野田又夫・久野収・山崎正一・串田孫一)、平凡社、1954 年、363 頁。この哲学事典の表現を直に引用すれば、“狭義では(ことに自然科学において)、相異なる概念によってあらわされる 2 つの現象が必然的に継起する場合、時間的にまえなるものをあとなるものの原因、あとなるものをその結果とよぶ”とされている(同上)。なお、この表現は、空間的比喩を借りて、過去が現在より前にあり、未来が現在より後ろにあるという考え方によっている。別の比喩では、過去が下にあり、過去の上に現在が積み、さらに現在の上に未来が積もっていくというイメージでも可能であろう。これらとは対照的な考え方になるが、目的論の暗黙の前提として、未来が前から現在へと迫ってきて、現在となつてから、過去となり後ろへ過ぎ去っていくというイメージもある。
- 13) 新村出編著『広辞苑[第六版]』、岩波書店、2008 年[第一版第一刷 1955 年]、216 頁。
- 14) 同上、223 頁。仏教的な文脈における“因縁”の他の定義は、“因と縁から結果[果]が生ずること”であり、“縁起”とも同義で、“転じて、定められた運命”も意味している(同上)。また、日常的な使い方としては、“因縁”は、“きっかけ。動機。しかるべき理由”と“由来。来歴”および“ゆかり。関係。縁”を意味する(同上)。

- 15) 同上、1373 頁。“条件”には、“くだり。簡条”とか“法律行為の効力の発生・消滅を、将来の不確定な事実の成否にかからせる付款”という意味もある(同上)。
- 16) 小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、787 頁。他には、“契約など”を示す際の“terms”や“要求”意味する“requirement”や、“必要な資格”を示す“qualification”がある(同上)。
- 17) 下中編、前掲事典、605 頁。“条件”とは、“ある事物がある意味をもつために必要な事情”であり、“ある一定の結果、意味はその根拠から生まれるが、その場合の事情のいかんによってことになったあり方をとる”ときに、“この事情を条件という”といった説明がなされている(同上)。
- 18) “結果論”とは、“原因や経過を無視して、ただ結果だけを見てする議論”と定義されている(新村出編著、前掲辞典、880 頁)。
- 19) 同上、2883 頁。“要因”とは、“物事の成立に必要な因子・原因”である(同上)。なお、“要因”に相当する英単語は“factor”である(小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、1783 頁)。また、“cause”には、“(行動などの) 動機、起因”という意味がある(小稲編、前掲辞典、342 頁)。
- 20) 英単語の“trigger”には、“(銃砲の) 引き金”以外に、“(事件・行動の) 起因、動機、引き金”という意味がある(同上、2258 頁)。
- 21) “前提”に相当する英単語について、“あることを行うために必要な条件”という意味では“prerequisite”が示されている(同上、942 頁)。なお、“あることが真であるための前提条件”としては、“presupposition”が示されている(同上)。また、形容詞では、“前提の”を意味する“prerequisite”が、“必要な”を意味する“necessary”が、“必須の”を意味する“essential”が示されている(同上)。
- 22) “誘因”という日本語は、“原因”という意味では“cause”に訳されるが、“誘因となる刺激”という意味では“incentive”が当てられる(小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、1763 頁)。また、動詞としては、“原因となる”として“cause”が示され、“原因となって引き起こす”として“induce”が示されている(同上)。
- 23) “cause が「原因」を意味するときは前置詞の of が後に続き、「理由」のときは for が続く”(同上、534 頁)。“cause”は、“結果を生み出すもの[もと]”以外に、“(不平・喜びなどの) 根拠；わけ、理由”や“十分な理由、もっともないわれ”も意味する(小稲編、前掲辞典、342 頁)。
- 24) “cause”には、“(社会改良などの運動に献身するような) 運動、主張、主義、大義、大目的”という意味もある(同上)。
- 25) アリストテレスは、“原因”概念を“質量因、形相因、動力因、目的因”の4つに分類している(下中編、前掲事典、363 頁)。そして、“目的因”については、“ものはなんのために存在するか、なんのためになされるか、をあらわす目的というものは、そのものの存在、生成、行為をうながし理由づけるものであるから、ひろい意味で1種の原因と考えられる”(同上、1175 頁)。
- 26) A.S.Hornby, *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English [Eighth edition]*, Oxford University Press, 2010[First Published 1948], p.1305.
- 27) *Ibid.*
- 28) 形容詞“desirable”は、“求めるに値する；望ましい、願わしい；好ましい；感じのよい；立派な”を意味する(小稲編、前掲辞典、566 頁)。
- 29) “expect”という動詞には、“＜…の来る[起こる]ことを＞期待する、予期[予想]する、待ち設ける”という意味がある(同上、733 頁)。
- 30) 小島・竹林・中尾編著、前掲辞典、1588 頁。「方法」を意味する他の英単語について、“様式”として“manner”が、“手段”として“means”が、“処置”として“measure”が、“手順”として“procedure”が、“秩序立った方法”として“system”が、“工夫”として“device”が、“方策”として“policy”が列挙されている(同上)。なお、“首尾一貫して1つの体系を成し、規則に従った秩序立った方法はsystem”であり、“method も秩序立った方法の意であるが、system は分類とか分析とかについて終始一貫して1つの体系を成す場合に用いる”ので、“「方法」よりは「方式」という日本語のニュアンスに近い”と付け加えられている(同上)。
- 31) 小稲編、前掲辞書、2392～2393 頁。
- 32) 同上、1335 頁。
- 33) 村治能成編『哲学用語事典』、東京堂出版、1974 年、391 頁。